

労働価値説は歴史普遍的か？——マルクス・フーコー・アーレント

フーコーは『言葉と物』のなかで、アダム・スミスとリカードの名を挙げながら、労働価値説が古典経済学の基礎理論として成立したのは、「人間」を中心とする 19 世紀以降のエピステーメにおいてであったと論じている。価値の源泉を「労働」に見出すという思考は、同時に、人間の身体（ゾーエー）のうちに価値の源泉を見出していることを意味している。

フーコーによれば、西欧社会のエピステーメは、16 世紀以前が「類似」、17・18 世紀が「表象」、19・20 世紀が「人間」を中心として、それぞれ構成されていた。重商主義が興隆した 17・18 世紀には、貨幣＝金があらゆる富を表象する記号となり、その価値は貨幣＝金に内在している、と考えられていた（「表象」のエピステーメ）。これに対して、19 世紀以降には、価値の源泉が貨幣のうちにではなく、人間の「労働」のうちに求められるようになる（「人間」のエピステーメ）。

この変化は、19 世紀以降にあらゆる人間が等しく「労働者」となり、同時に「ホモ・エコノミクス」となって社会のうちに住まうようになった結果であると考えられよう。このとき、労働者およびホモ・エコノミクスとしての近代人は、市民的生（ビオス）としてよりもむしろ生物学的生（ゾーエー）として等しい存在である。

さて、以上のように「労働」を中心とする経済学が成立したのが 19 世紀以降の「人間」を中心とするエピステーメにおいてであったとするならば、それは同時に、スミス・リカード・マルクスらが依拠した労働価値説が、あくまで 19 世紀以降の知的布置において生み出された特殊歴史的な理論であったことを示唆するのではないか。つまり、18 世紀末の市民革命と産業革命を経て、19 世紀に本格的に花開いた資本主義経済において、身分や地位にかかわらず、原則的にあらゆる人間が「労働者」および「ホモ・エコノミクス」となった時点において初めて、あらゆる人間の身体に等しく内在する「労働力」なるものが見出され、それがあらゆる富の価値の源泉であると名指されるようになったのではないか。

アーレントも『人間の条件』のなかでこれに類似した指摘を行っている。近代以前には、活動>仕事>労働というヒエラルキーが伝統的であったにもかかわらず、近代以降には、労働>仕事>活動というヒエラルキーへと反転し、「労働」が特権的な地位を得ることになる。その結果、「労働」が人間の本質的営みと見なされるようになったのが近代社会の特徴であり、その傾向を象徴するのがマルクスの思想だというのがアーレントの考えであった。多くのマルクス解釈では、資本主義が歴史特殊なシステムであるのに対して、労働価値説は歴史普遍的な原則であるとされているが、それは本当か。労働価値説もまた歴史特殊な理論であり、マルクスはその理論を近代以前にまで投射してしまっているのではないか。本報告では、フーコーとアーレントを手掛かりに、労働価値説の歴史特殊性について考察する。